

おびたし、亦年々極寒のころ、夜ごと洛裏洛外を徘徊し、極貧の者を看著て、米錢を施すこと多年、かつて姓名をかくして、他に語る事なし、然ども隠たるより顯るゝはなしといつしか公廳に達して、忽ち宣めされて褒詞褒賞めいしやうしやうをたまはりけり。○中略都家より二三丁四方の小家は這大黒屋の恩にあづからざる者は稀なりしとぞ、他家といへども傾廢におよばんとするを看ては、是を歎て、みづから求て其家にゆき、何吳くわと執つかまかなひ、再興をなさしむる、其才智また賞しつべし、公廳より褒賞めいしやうをたまはりし事、五六度におよべるとぞ、

〔子弟訓〕仁

他をめぐみ我をわすれて物ごとに慈悲ある人を仁と玄るべし。

○

〔日本書紀三神武〕戊午年十有二月、饒速日命、本知天神懸懃、唯天孫是與、且見夫長髓彦稟性懷恨不可教以天人之際、乃殺之、帥其衆而歸順焉、天皇素聞饒速日命是自天降者、而今果立忠効、則褒而寵之、此物部氏之遠祖也、

〔先代舊事本紀五天孫本紀〕弟宇摩志麻治命略○中

中州豪雄長髓彦、本推饒速日尊兒宇摩志麻治命爲君奉焉。○中略于時宇摩志麻治命不從舅謀、誅殺恨戾、帥衆歸順之。○中略天皇寵異特甚、詔曰、近宿殿内矣、因號足尼、

〔日本政記一神武〕賴襄曰、○中略舊志稱帝德明達豁如、帝新得諸縣、而署之首長、皆疇昔之抗兵反刃者、仍而用之、無所變更、其感恩効力於民、民亦便安之可知也、且夫以敵帥之家嗣、而既納其降、則授之干戈、委以環衛之任、而不疑、非所謂推赤心人腹中者哉、

〔續日本紀二十七稱德〕天平神護二年三月丁卯、大納言正三位藤原朝臣真楯薨○中略真楯度量弘深、有公輔之才、